

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2394400010		
法人名	特定非営利活動法人 和		
事業所名	グループホームじぶんち		
所在地	知立市谷田町南屋下88番地2		
自己評価作成日	平成27年12月21日	評価結果市町村受理日	平成28年2月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&amp;Jigvosyo_Cd=2394400010-00&amp;PrefCd=23&amp;VersionCd=022">http://www.kaigokensaku.jp/23/index.php?action=kouhyou_detail_2015_022_kani=true&amp;Jigvosyo_Cd=2394400010-00&amp;PrefCd=23&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』		
所在地	愛知県名古屋市中熱田区三本松町13番19号		
訪問調査日	平成28年1月15日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

ホームでの生活は家庭の延長上にあるものとして、入居者本人が主体的に生活できるように継続して支援している。衣食住全般に目を向け、安心して快適に過ごしてもらえるように職員一丸となって取り組んでいる。特に今年度は、入居者の希望、要望に常に耳を傾け、個別の24時間シートや身だしなみチェック表、アセスメント表を適時更新して、小さな変化にも気づき、状態の変化や支援方法の変更の把握にも努めた。変化があった場合は、その原因、背景を考えて支援を行なった。また、記録の書き方を学び、日常の言葉づかいや話し方にも注意をはらいながら、誰にでもわかりやすい言葉の使用に努めた。すべての情報を職員全体で収集し、共有することに力を入れ、気づきの力の向上をめざした。また、外出にも力を入れ、地域との交流を深めるためにも様々な行事にできる限り参加した。大切な家族を安心して過ごしてもらえる場所として、ご家族との絆も大切に、信頼関係を築けるように努めた。職員は内部研修や外部研修等を通じて、いまよりもより良い支援ができるように常に努力している。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

ホームは、併設の小規模多機能を利用しながらグループホームへ移行することが可能である。ホーム入居前からその方の細かな把握が行われていることで、その方に合わせた支援が可能が行われている。ホームは併設型の利点を活かして、夜間は職員複数の体制であることで、非常災害時にも柔軟な対応が可能であり、利用者、家族にとっては、安心できる体制である。職員の資質向上に向けた取り組みについても、定期的な内部研修の実施の他にも外部研修にも参加できるように、職員の勤務体制の配慮も行われている。その他にも、法人で職員をサポートする体制も整えられていることもあり、現状、職員の離職がなく、利用者への継続した支援が行われている。アセスメントについても、24時間シートを活用した取り組みが新たに始めており、職員間でより良いホームづくりへの取り組みを継続している。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	内部研修等で、管理者とともに、法人理念等についての話し合いを行い、共有して実践につなげている。繰り返し会議等で、どの項目に基づくものなのかも話し合っている。	法人の理念をはじめ、職員指針等、理念の共有と実践に取り組んでおり、職員一人ひとりが定期的に自己評価し振り返る機会をつくっている。また、理念を玄関ホールに掲示し、外来者にも分かるように取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	町内会に加入し、地域の行事等に参加したり、事業所の行事に地域の方々に参加していただいている。声を掛けてくれたり、野菜をくださる方々が増えてきている。近所の幼児連れの親子が遊びに来てくれたり、子ども110番の家に登録するなどして、交流をしている。	地域の方から野菜をいただく等、日常的な交流の他にも、地域の祭事に参加する取り組みも行われている。また、併設事業所の行事に地域の方が訪問した際には、ホームの利用者も参加し、交流につなげている。	地域で行われていたサロンが、様々な事情で行われなくなっている。ホームで協力できる取り組みがあるのかどうか、関係機関とも確認しながら交流の場につながることを期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	在宅での介護方法や施設入所などについて、地域の方から相談を受けることはある。また、地域の行事などに入居者も積極的に参加し、理解してもらえる機会は増えている。地域のセミナーや認知症カフェなどで、介護保険制度やホームなどの紹介をして、理解を深めてもらえる機会を作っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議では、利用状況や行事等の取り組み、ヒヤリハット・事故報告書の提出状況などを報告し、話し合ったり、助言を頂いている。会議で出た助言や要望等については、その都度、対応するよう努めている。少しずつではあるが、ご家族の参加も増えてきている。	会議は併設事業所と合同で開催され、運営状況の詳細を資料も活用しながら報告し、出席者にホームへの理解を深めてもらっている。また、会議に福祉の専門職者の出席が得られており、助言等にもつながっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	市の担当者とは一ヶ月に1~2回程、市役所に行った際、現状を報告し、助言を頂いている。運営推進会議にも参加していただいている。	市の担当職員とは、定期及び随時の情報交換等、関係づくりにつなげている。また、地域包括支援センターとも、地域ケア会議に出席したり、認知症カフェを通じた講習会の講師で協力する等の取り組みが行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	内部研修等で、身体拘束について学んでいる。入居者の行動のパターンや予測される事故等について職員間で情報を共有して、転倒や離脱の危険がある入居者に対しては職員間でコミュニケーションを図り、併設事業所とも連携して、センサー等を使用し身体拘束せずに対応するよう努めている。今年度もスピーチロックについて、研修を行い、普段から、意識して実践を行っている。	身体拘束を行わない方針のもと、現状、身体拘束等は行われていない。身体拘束に関する基本的理解や職員による対応の確認等、定期的な研修会の機会もつくられている。また、日常的にも気になった際には、注意を促す取り組みも行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	内部研修等で、職員全員が虐待防止の研修を受け、お互いに振り返っている。特にスピーチロックや言葉による虐待を行わないように意識して、日々取り組んでいる。入居者の様子を観察し、報告書等で情報共有を行い、虐待の兆候に気付くように努めている。特定の職員に対して、強い言動をする入居者の介助等を職員間で交代するなどして、防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	内部研修等で、権利擁護について研修を受けており、必要な入居者が現れた時には速やかに対応できるように努めている。日頃から、新聞記事にも目を配り、掲示するなどして、活用に努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約の締結の際は、入居者や家族が理解しやすいように説明を行うように心がけている。また、不安や疑問点等がないか尋ね、あった時は不安や疑問が解消するまで十分な説明を行うように努めている。専門用語は使わず、できる限り、分かりやすい言葉を使用し、理解してもらえるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	契約時に苦情申し立てについての説明を行っており、日常的にも意見・要望をくみ取り、運営に反映させるように努めている。年2回行っている家族懇談会では、家族同士も交流できるように努め、この数回は職員にも家族の思いを直接聞く場となっている。	年2回の家族懇談会の機会をつくっており、家族との交流につなげている。定期的な家族との面談の他にも、玄関ホールに意見箱の設置も行われている。また、法人の便りの他にも、毎月のホーム便りの発行が行われており、利用者の様子を報告している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	職員会議や事業所会議、朝の打ち合わせ時等、意見や提案を伝える機会があり、必要に応じて、それらをどのように実践するか、検討した上で、反映されている。また、報連相を確実にこなすように努めている。	ホーム内の会議を月に複数回実施したり、併設事業所との合同の会議も行われており、意見等の把握と運営への反映に取り組んでいる。管理者による個別面談の他にも、新たに職員に「自己アピール票」を書いてもらう、振り返りの取り組みも行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	日常的に、個々の職員とコミュニケーションを図ることで、状況を把握し、家庭事情にも配慮した職場環境・条件の整備に努めている。年2回以上と必要時には面談をするなどして、悩みを一緒に考えたり、目標を立てている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	日常的に、個々の職員とコミュニケーションを図ることで、各職員の力量や意欲等を把握し、積極的に研修等や、資格取得を勧めている。各職員が目標を持って、挑戦できる環境や支援、体制をつくっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	外部の懇談会等で他事業所と話しをして、お互いに情報交換等を行っている。また、積極的に外部研修に参加し、同業者との交流を行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	相談があった時点で、管理者及び職員が契約前に必ず本人に会いに行っている。そこで、本人自身から要望や不安等を聞き、本人が入居に際して安心できるように、信頼関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	家族が安心して、契約に臨めるように、最初の相談から契約に至るまで、家族自身の不安や要望等を受け止めるため、何度でも面談を行い、疑問や不安を解消し、信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	本人の状態や家族の状況、介護力等を聞き、すぐに入居ではなく、同一法人内の居宅介護事業所や他事業所への紹介も含めて、その時、本人・家族にとって、最適なものを提案できるように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	入居者にはまず自分でやっていただき、職員は「待つ」という姿勢を第一として支援している。家事活動にも参加してもらい、「ありがとう」の言葉を伝えている。本人のペースに合わせて声かけをするなど、急かさずに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	事故や著しい変化があった時はすぐに連絡し、状況説明や、今後の支援の仕方について話し合っている。また日常的にも、面会時や受診時に本人の様子を伝え、定期、不定期で、今後の支援について話し合いを行っている。家族に職員の顔を覚えてもらえるように写真と名前入りの用紙を作成して、配布している。面会時等に挨拶を行ない、積極的に日頃の様子等を話し、絆づくりに努めた。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	毎年参加していた地元の祭りを見に行ったり、面会にも来られやすい雰囲気を作り、馴染みの人や場所との関係が途切れないように努めている。毎年、年賀状を作成して家族に送っている。今年度は普段会えない友人や親戚の方の面会もあった。	利用者の入居前の友人、知人がホームに訪問したり、併設事業所からの移行の方が多いこともあるため、利用者同士の関係継続にもつながっている。また、家族との食事や買い物等を通じた交流の他、時には家族との外泊の機会が得られている方もいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	居室で過ごす時間を大切にしているが、日に何度か声掛けをし、入居者同士が一緒に時間も過ごせるように努めている。行事等の写真をアルバムにしたり、廊下に飾るなどして、入居者同士でのコミュニケーションにも役立てている。話しが苦手な方などには職員が間に入り、入居者同士の会話も楽しめるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	契約終了した方の近況を把握したり、退居後も相談や支援に努めている。看取りを行なったご家族が行事を手伝ってくださり、ホームに立ち寄っていただけることもある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	センター方式等を使用したり、本人自身の言葉や行動を記録するなどして、希望や意見を汲み取るよう努めている。今年度は24時間シートを活用し、会議ごとに見直しを行ない、随時変更している。全職員で確認し、話し合い、本人の希望に沿えるよう工夫をしたり、必要としている支援を確認しあっている。また、困難な場合には家族に相談し、本人の希望、意向の把握に努めている。	新たな取り組みとして、24時間シートを活用した担当職員によるアセスメントを実施しており、利用者の把握につなげている。また、毎月、複数回のカンファレンスの際には、利用者全員の検討が行われており、利用者の意向等に関する共有につなげている。	ホームでは、新たな取り組みも始めながら、利用者の思いに寄り添った支援の継続に取り組んでいる。職員間で意見を交わしながら、ホームのより良い取り組みに活かされることを期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	センター方式を使用し、事前に本人や家族に記入してもらったり、聞き取りをするなどして、生活歴などを把握するよう努めている。アセスメントシートを個々に合わせて作成しており、全職員でアセスメント表を見直す機会を作っている。また日常の会話の中から、何気ない一言を聞きもらさず、本人の生活歴や暮らし方へのこだわりや思いを把握するよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	入居時にセンター方式を使用して、本来の生活リズムを把握するよう努めている。日々の生活をできるだけ詳しく記録し、少しずつ変化していく状況を全職員で共有し、その方にあった支援方法を工夫する努力をしている。今年度は24時間シートや身だしなみチェック表等を活用し、日々の生活リズムや支援を把握している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	家族面談をケアプランの見直し時期に合わせて行なうようにしており、家族とも現状と今後について共有して、次期介護計画を作成している。入居者にサービス担当者会議に参加してもらい、本人の思いや困りごとを職員全員で共有する機会をつくり、次期介護計画に反映している。	介護計画については、基本6か月毎に見直ししているが、利用者の状態変化に合わせた短期間での見直しも行われている。職員が日常的に計画の内容を意識するようにケアプランチェック表も用意されており、定期的なモニタリングにつなげている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	日々の個人支援経過を記入することで、変化等に気づき、会議等でより良い支援につなげるよう努めている。今年度は、記録の書き方を学び実践する事を目標に掲げ、誰が読んでも分かりやすくするため、6W2Hを意識した書き方やできるだけ専門用語を使わないように努めている。事実のみではなく、その時の本人の思いや状況が伝わるような記録が書けるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	それぞれの本人・家族の状況に合わせ、支援方法を工夫するよう努めている。気軽にニーズを伝えられるよう、家族などにも「無理だと思わずに、まずは相談して下さい。一緒に考えましょう」と普段から声掛けしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	町内会に加入して、町内の行事には積極的に参加している。また、書道や絵手紙手芸などの教室に本人の意思も確認しながら、参加し、作品を地域の文化祭に出展するなどしている。散歩や買い物等にも行くことで、本人が豊かな暮らしを楽しめるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	協力医療機関との連携は勿論、受診時に日常の様子などをまとめた介護記録を作成するなどして、入居者それぞれのかかりつけ医とも円滑なコミュニケーションがとれるよう努めている。受診結果等も確実に情報共有するために業務日誌に記入している。	協力医とは、定期的な訪問診療の他にも随時の連絡が可能であり、利用者の身体状態に合わせた支援が行われている。家族による受診の際には、情報提供が行われている。また、ホームに看護師が勤務しており、利用者の健康チェックが行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	普段から入居者の健康状態を観察し、通常と違う様子があれば看護職員に相談し、情報の共有を行なっている。必要に応じて、夜間でも緊急に受診をするなどの対応を行っている。薬の変更等、ミスの無いように口頭と業務日誌での申し送りを徹底している。医療で少しでも疑問、不安に思うことがあれば看護職員に尋ねることができる環境にある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	今年度は1件もないが、仮に入院があった場合には定期的に病院へ訪問し、医師や病院との情報交換や入院中・退院後についての相談などを行い、退院後の生活へスムーズに移行できるよう、円滑なコミュニケーションが取れるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	重度化されてきた入居者のご家族とこまめに情報交換を行ない、今後どのようなことが起こりうるかを話し合っている。ホームでの看取りを希望されている方には、随時、主治医や家族と確認を行いながら、その時が来ても、落ち着いて支援できるように常日頃から、準備を進めている。「ホームで家族を看取ってもらいたい」と家族に思ってもらえるような信頼関係や環境整備に努めている。今年度はお二人の方の看取りを支援できた。	ホームでは、利用者の看取りに向けた取り組みも行われており、協力医とも連携を深めながら、ホームでの看取り支援の実績もある。家族とは、ホームでの支援内容を示しながら、利用者の状態変化に合わせた話し合いが行われている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	看護師を中心に内部研修で緊急時の対応等を学んだり、会議や研修で色々なパターンを想定してシュミレーションを行っている。マニュアルも変更点がある場合は、速やかに変更し、全職員に掲示・配布している。昨年度末に、消防署を招き、普通救命救急の講習を受講した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	年に数回は様々なパターンを想定し、訓練等を行っている。今年度も運営推進会議で実際の訓練を見学してもらい、地域の方々にも理解を深めてもらえるように努めた。また地域にも災害時に協力を依頼している。いざという時の防災意識を常に持つよう努めている。	年4回以上の避難訓練が実施されており、併設事業所と連携した訓練が実施されている。運営推進会議を通じた避難訓練の実施を行っており、地域の方との連携につなげている。また、ホームの倉庫内に、水や食料等の備蓄品の確保も行われている。	ホームでは、非常災害時に備えた備蓄品の確保に取り組んでおり、地域の方の受け入れも想定した準備も行われている。ホームで協力可能な取り組みを検討しながら、より良い協力関係につながることを期待したい。



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	特にプライバシーが確保されなければならない時には、必ず扉を閉めたり、本人にだけ聞こえるように声掛けをしている。会議や研修等でも取り上げ、言葉づかいや声かけの方法などについて話し合い、常に注意を払うように努めている。今年度は、認知症の理念についての研修に力を入れ、人格を尊重した支援に努めている。	職員指針の中に、自分が嫌なことは他人にもしない、と掲げており、利用者への声かけや対応等、利用者の尊厳への配慮にも取り組んでいる。また、職員の接遇に関する研修会の機会をつくり、職員の振り返りの機会にもつなげている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	アセスメントを活用して、できること・できないこと、わかること・わからないことを全職員で把握し、本人の自己決定しやすい声かけをおこなっている。本人が「こうしたい、やりたい」と思ってもらえるような支援に努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	大体の1日の流れはあるが、入居者が思い思いのペースで生活できるように支援している。行事や外出なども、参加するかどうかは入居者の意思やサインを読み取り、参加したときには成就感が持てるように配慮している。個々の行動のペースや特性を把握し、配慮できるように努めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	個別の身だしなみチェック表を使用し、会議時に職員で確認しあい、変更があれば随時、更新している。年に数回ではあるが、行事の時に、浴衣を着たり、お化粧をして、おしゃれを楽しめるよう支援している。服を選ぶ際はその方の好みも取り入れるよう心掛けている。その時に合った本人への声かけや支援に努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	献立を入居者と一緒に考えたり、作ったりしている。食事作りではその人の力に合わせて、包丁を使ったり、盛付をしたりと一緒にやって行うことで、食事への関心を失うことなく、楽しんでもらえるように努めている。食事をゆっくりおいしく食べてもらえるように言葉のかけ過ぎにも注意している。	利用者の希望や嗜好に配慮したメニューを作成し、買い物や調理の際には、利用者も出来ることに参加している。利用者一人ひとりに合わせた食札を用意し、ミキサー、トロミ、大きさ等の配慮が行われている。また、食事の際には職員も一緒に食事を行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事量・水分量の把握は毎日行っており、摂取しやすいように調理法や提供法も工夫している。栄養素の摂取がしにくいものは補助食品などで補い、バランスに配慮している。水分量も確保できるように、個人の好みに合わせて、提供している。本人の身体の状態に合わせて食器を選んだり、水分の状態も変化させ、安全に摂取できるように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	入居者一人ひとりの状態に合わせて、声掛けや必要に応じて手を添えたり、仕上げを行うなどの介助をして支援している。月に2回程、歯科の訪問診療も取り入れ、ケアの仕方についても助言を受けている。助言されたことは、みだしなみチェック表に記入し、日常の支援にも活かしている。口腔体操や舌の運動も取り入れ、嚥下が少しでもスムーズにできるように工夫している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	チェック表で排泄パターンを把握し、できるだけ、トイレで排泄できるように誘導を行なっている。支援が必要な入居者にはさりげない声掛けやトイレ誘導をしている。	職員による利用者全員の排泄チェックが行われている他、スタッフルーム内のホワイトボードを活用する取り組み等、職員間の情報の共有につなげている。また、医療面でも連携を深めながら、排泄状態の維持、改善に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	チェック表で排便チェックを行なっているが、特に便秘、下痢気味の方は、個別の排便チェック表を作り、細かく記録をしている。便秘気味の方が多いため、朝食にヨーグルトやバナナなどの排便を促す食材を提供し、できるだけ、自然排便を促している。下剤などの調整は主治医とこまめに相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている。	一人ひとりの意思や希望を尊重して、入浴できるように努めている。入浴環境も整え、ゆっくりとリラックスできるように配慮している。また体調不良時には、シャワー浴や清拭に対応している。夕方以降に入浴したいという希望もあり、時間調整を行なっている。	利用者の身体状態等に合わせながら、最低週2～3回入浴できるように支援しており、時間についても夕食後の入浴にも対応している。また、重度の方も入浴できるように職員間で入浴方法を検討したり、季節の柚子湯等の楽しみも行われている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	入居前の生活習慣を大切にしている。居室の明暗や温度、湿度に気を配り、入眠しやすい環境づくりに努めている。日中も、体調等に配慮し、休息を勧めている。置き型の加湿器を置いたり、冷房が苦手な方には扇風機などを使用するなど配慮している。また梅雨時期などは布団乾燥機やレイコップを使用し環境を整え、安眠を促している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	各入居者の医療ファイルを整備し、服用している薬や効能、用量等をまとめて、職員が閲覧できるようにしている。確実に服薬してもらうため、服薬方法を一覧表にしたり、声かけや服用方法の工夫も行っている。個人の状態に合わせて、特に粉薬服用時は寒天ゼリーを使用している。職員間で間違えることのないよう、お互いに声をかけあっている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	今年度は、余暇活動に力を入れ、個別にできること、できないことを一覧表にして、会議でも話し合い、全職員で把握できるようにしている。余暇活動で作成したものをホーム内の壁に飾ったりして、作成後も楽しめるようにしている。また個別に余暇活動を行ない、作品をつくって、地域の文化展に出品した。ひとりひとりの能力や好き嫌いに合わせ、家事活動や楽しみ事をしていく支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	体調や天候等を考慮しながら、本人の体調に合わせて無理のないよう、楽しみながら散歩に行ったり、買い物に行ったりと支援している。また、それぞれの入居者の状況に合わせた長距離、短距離の外出等も取り入れている。町内のイベントに限らず、図書館や文化会館で行われるイベントにも参加し、外出する機会を増やした。家族との外出や外食、お墓参り等へも出かけられるよう支援している。	ホームの外に自販機を設置しており、利用者が日常的に散歩を兼ねてコーヒー等を買って出かける機会をつくっている。また、定期的な外出行事として、地域の祭事や市内のカフェの他、花見等の季節に合わせた外出の機会をつくるように取り組んでいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	外出や買い物の際の会計時に、入居者にお金の受け渡しをやっていただけるように努めている。日常的な現金の所持を希望される入居者の方については家族とも相談して、日常的に現金を所持できる環境を作り努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	居室に固定電話を設置することもできる。絵手紙教室で描いた絵手紙を家族へ送る機会を設けたり、年賀状を作成して家族や親戚などにも出せるように支援している。家族との食事会時にはプレゼントと入居者本人がメッセージカードを書いて手渡している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	特に温度についてはこまめにチェックして、エアコンの調整などを行っている。季節に合わせた壁面と一緒に作ったり、廊下や食堂にはその他の作品や行事の写真等も展示している。季節感のある飾りつけを行ない、話題作りに努めている。食堂では食事後の食べこぼしを速やかに片づけて、気持ちの良い環境づくりに努めている。	リビングは天井が高く、吹き抜けになっていることもあり、利用者が圧迫感を感じないような配慮が行われている。リビングには畳コーナーがあり、職員と一緒に過ごすこともある。また、通路の壁には、季節の飾りつけや行事の様子が写真で掲示されてある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	日中は食堂や畳部屋を常に開放しており、新聞を読んだり、数人で腰かけ談話している。共有スペースでも個々を大切に、無理にグループとしての行動を求めないようにしている。新聞が読みたい、テレビが見たいと食堂へ出てくる方もみえ、自由に過ごせる空間作りに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	家族の写真や自分の作った作品を飾り、自分の居室であるという安心感を持ってもらい居心地よく過ごせる居室づくりに努めている。また入居者の状況等に変化があった場合は家族とも相談して、安全で生活しやすい居室作りに努めている。掃除道具を工夫して、自分の部屋を掃除できるように支援している。シーツ類や寝具は定期的に洗濯や干すようにしており、清潔に快適に休める環境を提供している。	居室は広く、ゆったりとした構造であり、利用者が寛ぐことができるように配慮されている。利用者により、馴染みの家具類を置いたり、趣味の楽器類を持ち込んでいる方もおり、一人ひとりに合わせた居室づくりが行われている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	アセスメント(センター方式)や記録、会議等で情報収集し、安全で自立した生活を送れるように、環境整備に努めている。廊下や共有スペースには移動の際に危険がないよう、物の置き場所等に注意をしている。		